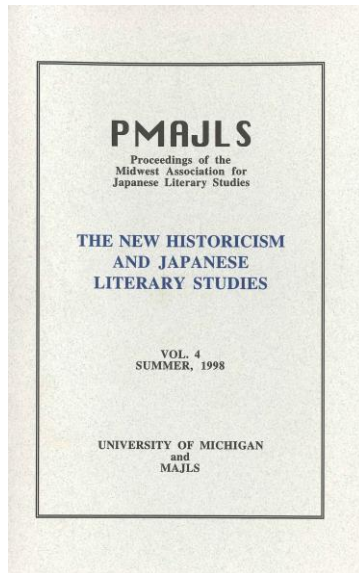


連歌興行に見る一揆精神の変遷  
“Ikki Spirit in Renga”

鶴崎裕雄 Tsurusaki Hiroo

*Proceedings of the Midwest Association for  
Japanese Literary Studies* 4 (1998): 216–233.



*PMAJLS* 4:  
*The New Historicism and Japanese Literary Studies.*  
Ed. Eiji Sekine.

## 連歌興行に見る一揆精神の変遷

鶴崎 裕雄 (Tsurusaki Hiroo)

帝塚山学院大学

### 一 寄合の文芸、連歌

中世後期、南北朝時代から室町時代・戦国時代にかけて、日本の各地に、村落の武士や在地の領主を中心に血縁的・地縁的な連合形態・団結関係、いわゆる国一揆・国人一揆が存在した。これは、武士たちの一揆で、土民たちの一揆でも支配体制を覆そうとする革命的な一揆でもない。

一方、同じ時代に流行した連歌は、四、五人から十数人の複数の作者によって、五七五（長句）と七七（短句）を交互に詠み続けて創作する文芸で、まさに寄合文芸を代表するジャンルである。

和歌の独詠詩に対して、唱和詩として発生した連歌の元始は、万葉集の時代には、短歌を上句と下句に分けて二人して一首の歌を詠むようになった。いわゆる短連歌である。続いて幾つもの句を連ねる長連歌、鎖連歌へと発展し、百句を一巻とする百韻連歌が生まれた。江戸時代には、この連歌に代わって三十六句の歌仙形式の排諧連句が流行した。

国人一揆と連歌は、時代が同じというだけでなく、「揆を一にする」という精神で共通する。武士の連合や団結は、心一つにして外敵にあたる。連歌もまた、連衆が心一つにして百韻をまとめる。とすれば、平和時の連歌の場は、武士たちの連合を助長し、団結心を高めることとなる。

以下、中世後期の村落の武士・在地の領主だけでなく、室町幕府の管領細川氏や近世初期の加賀前田藩の連歌を紹介し、連歌興行に見る一揆精神の変遷を眺望したい。

## 二 細川千句

文安年間以前の十五世紀前半から、永禄年間以後の十六世紀後半にかけて室町幕府の管領細川氏は毎年二月二十五日に京都北野天満宮に千句連歌を奉納した。連衆は細川氏一族をはじめ細川氏の有力家臣や招かれた公家や僧侶、連歌師たちで、五座に分かれて、それぞれの座で二つの百韻を一日の内に詠む。このように一日に千句、つまり百韻連歌を十卷（十座）詠むので「一日千句」とも呼ばれた。

五座は、管領が出座する「御前御座」をはじめ「房州」「摂州」「讃州」「丹州」の座である。「御前御座」の第一の発句は將軍、脇は管領細川氏、第二の発句は細川氏である。將軍は出座するのではなく、発句を詠むだけで、それも公家や連歌師の代作の場合があった。「房州」は細川氏一族の安房守による名称、他は細川氏の領国である摂津・讃岐・丹波による名称であろう。

『細川千句』の資料は、公家も参加しているところから、『実隆公記』『言継卿記』などの公家日記に見られる。また連歌師の句集『親当句集』『下草』『園塵』『那智籠』にも見られる。まとまったものに京都大学図書館菊亭本の『二月廿五日一日千句』がある。これは、発句・脇・第三句だけを記載した三つ物で、文明十七年（一四八五）から永正四年（一五〇七）の細川千句の各座の発句・脇・第三句とその作者、および御前御座の連衆が記されている。

『二月廿五日一日千句』から任意に抽出して、明応六年（一四九七）の場合を見よう。明応二年、細川政元は、河内に出陣中の將軍足利義材を追放し、足利義高(のち義澄)を擁立して將軍に据えて幕政を掌握した。この明応六年のころは、政元政権が最も安定していた時期である。御前御座の第一の三つ物の作者は將軍義高・政元・細川政賢、第二は政元・政賢・大館尚氏、房州座の第一は細川高国・安富元家・僧正、第二は冷泉為広・細川政春・元紀、摂州座の第一は政賢・薬師寺元長・赤松元祐、第二は元長

・元信・四宮長能、讃州座の第一は元家・延命・宗国、第二は明智玄宣・元家・解阿、丹州座の第一は元貞・円満・島田信直、第二は連歌師兼載・元貞・周木である。三つ物以外の御前御座の連衆は、冷泉為広・赤松元祐・伊勢盛相・金山政実・淡路政誠・飯川国資・能勢元頼・大館尚氏・明智政宣・杉原盛孝・西郡貞弘・神余昌綱・寺町通隆・細見光信・桂井坊恵俊・中沢泰綱・香西長祐・秋庭元重・波々伯部盛郷・南部国行である。

『細川千句』の特徴として、この千句を主催することは、管領となる細川氏の当主が右京大夫を名乗って京兆と呼ばれると同じように、歴代の当主の権威の象徴であることが指摘できる。一方、御前御座の第一の百韻が將軍の発句であることは將軍への忠誠・従属を示すものである。後に將軍は管領の傀儡となるが、形の上では管領は將軍の従者である。五座の内、摂州・讃州・丹州が細川氏の領国であることも注目すべきである。連歌は、中世の他の芸能と同様、信仰的要素が大きい。領国の安全・繁栄の願いが込められていると考えられる。さらに注目すべきは、細川氏の一族や家臣たちが一日千句に出座することである。出座することによって、細川氏当主への忠誠心とともに、たがいの連合が確認され、団結心が高められたであろう。

### 三 摂津国人衆の連歌興行

同じころ、細川政元が守護であった摂津国の国人たちもたがいに集まっては連歌会を催した。その一つ、文明十七年（一四八五）興行の『新住吉千句』の三つ物が大阪天満宮文庫にある。第一の発句は幕府の管領であり、摂津守護である細川政元、脇は能勢頼則である。連歌会では主催者が脇を詠む習わしがあるので、この千句の主催者は能勢頼則と考えられる。他に池田正種・同綱正・同正存・伊丹元親・塩川秀満らが顔を揃えている。池田氏・伊丹氏・塩川氏はそれぞれ摂津の国人衆であり、細川政元の有力被官である。

長享二年（一四八八）興行の『摂州千句』の三つ物も大阪天満宮文庫にある。連衆は、第一の発句は細川政元、脇は能勢頼則、他に肖柏・宗祇・池田正存・同正種・宗長・瓦林正頼らである。肖柏・宗祇・宗長は当時の代表的な連歌師、国人衆には池田氏と瓦林正頼が見える。発句は細川政元、主催は第一の脇を詠む能勢頼則で、前の『新住吉千句』と同じである。

『細川千句』では御前御座の第一の発句が将軍によって詠まれたように、ここでは第一の発句を摂津守護細川氏が詠む。これもまた守護への忠誠心を示すと考えられる。

永正四年（一五〇七）政元殺害以後、細川氏は家督をめぐって分裂する。永正五年、細川高国が同澄元を追放し、澄元派の池田真正を池田城に攻めた。真正は戦死し、降参した池田正盛に家督が認められた。その翌年、永正六年春、剃髪して性繁と名乗る池田正盛が『池田千句』を興行した。連衆は、第一の発句が肖柏、脇が性繁、他に池田氏同族の正棟・佐渡入道道泉ら、連歌師玄清・宗碩らである。前年、同族が高国派・澄元派に分かれて争った後、勝利を占めた高国派の正盛一派が謳歌した千句興行である。

。

『東山千句』は、永正十五年（一五一八）京都東山で能勢頼則の追悼のため連歌師宗長が主催した千句興行である。第一の発句は前内大臣三条西実隆、脇は肖柏、他に玄清・宗碩・瓦林正頼・寺町左衛門・波々伯部正盛らが参加した。玄清・宗碩は宗長と同門の連歌師、瓦林正頼は『摂州千句』にも出座した摂津の国人衆、波々伯部正盛は丹波の国人衆、寺町氏は幕府の有力家臣、いずれも細川高国の被官である。宗長はこの千句を「頼則歌連歌なをざりの数寄ならざりしゆへなり。逍遙院殿申たて、肖柏禪師・宗碩法師・寺町・波々伯部・河原林対馬守など上洛。まことに珍重の事なりし也」と自慢げに回想している（『宗長手記』上）。

ここで取り上げた摂津国人領主の連歌興行の特徴として、『新住吉千句』『摂州千句』の第一の発句が摂津守護である細川政元であることは、す

でに指摘したように、国人衆たちの守護への忠誠・従属を示している。また連歌興行そのものが、守護細川氏の被官である国人衆の相互の連合や団結、つまり一揆によって催された寄合の文芸なのである。ところが政変によって連合形態が変容する。細川高国と同澄元の抗争は池田氏内に分裂をもたらした。澄元派の真正に代わって家督を握った正盛の下に池田氏の再編が行われた。『池田千句』は正盛派による池田氏再編の象徴である。『東山千句』は宗長主催の追悼連歌であって、国人衆主催の『新住吉千句』『摂州千句』『池田千句』とは異なるが、宗長は国人衆の動向を見通した上で連衆を選び、『東山千句』を催したことであろう。

#### 四 宗牧の『東国紀行』に見る国人連歌

天文十三年（一五四四）から翌十四年、連歌師宗牧は、息子の無為（後の宗養）や弟子たちを伴って、東海・関東地方を旅行した。その紀行文が『東国紀行』である。『東国紀行』は天文十四年三月の隅田川渡河で終わるが、宗牧たちの旅行は白河関一見まで続き、同年秋、宗牧は下野国佐野で病に罹って客死した。

道中、各地の戦国大名や国人衆を歴訪する。それらは、近江の六角氏・尾張の織田氏・駿河の今川氏・相模の北条氏をはじめ、次に見る伊勢国員弁川流域の北方一揆や三河国西郡の国人衆、鶴殿氏・松平氏である。まず北方一揆を見よう。

伊勢の北方一揆は、伊勢国北部の鈴鹿山脈と養老山地に囲まれた員弁川流域の国人衆、田能村氏・治田氏らの連合で、『勢州四家記』や『勢州軍記』（群書類従ほか）に「伊勢国は四家に分て守護せり。南五郡は国司領也。北八郡は工藤の一家、関の一党、其外北方之諸侍守護之」などとある「北方之諸侍」である。『醍醐寺文書』（大日本古文書 家わけ 一九）の「伊勢国内十ヶ所人数注文」（折紙）に「きた方いつき人数」として「おうき（大木）」「たなむら（田能村）」の名が見える。

『東国紀行』（群書類従）では、天文十三年十月晦日、近江国から鈴鹿山脈の龍華越（大君が畑越）を越えて北伊勢の白瀬の里に入った宗牧一行は、田能村兵部少輔に申し付けられた飛那井彈正の出迎えを受ける。その翌日、十一月朔日、鈴鹿の山々の高根おろしが激しくて出発を見合わせていると、治田松雲軒より、明日連歌の一座を催したいという使があった。急な興行ではあったが、道のりも近いので、晴れ間に馬に乗って治田に着いた。そこには田能村殿も「迎へがてら」といって、眼阿を同道してやって来た。さらに翌日、治田六郎左衛門の主催する連歌の一座があった。次の日は大泉まで進み、ここに数日滞在して、田能村兵部少輔はじめ、風瑞軒・瑞雲院・木唐斎らの連歌会に次々出座する。この後、一行は桑名より津島を経て名古屋の織田信秀を訪ねる。

群書類従本では、治田を「沼田」、田能村を「田熊」とするが、誤りである。白瀬・治田・大泉は員弁川の上流から中流域の村落で、現在の三重県員弁郡藤原町・北勢町・員弁町に属する。このあたりの国人衆が連合を形成して北方一揆と呼ばれていた。宗牧が下向したころは、田能村氏が一揆の中心であったようである。田能村氏に同道した眼阿は桑名あたりの連歌師のようで、この後も『東国紀行』に登場する。宗牧を迎えた田能村氏・治田氏ら北方一揆の面々が、このように数日にわたって連歌に打ち興じたのである。

『西郡千句』は、同年閏十一月、宗牧一行と三河国西郡の国人衆、鶴殿氏・松平氏らが催した千句連歌である。現在、蒲郡市と呼ばれている西郡の地形は、東西と北を山で囲まれ、南は海という、かなり外部との境がはっきりした土地である。この千句については『東国紀行』だけでなく、第四の百韻のみではあるが天理図書館綿屋文庫に懐紙の写本が現存しており、かなり連衆を知ることができる。

岡崎を経て深溝（愛知県幸田町）に一泊した宗牧たちは、翌日、西郡に向かう。すでに岡崎まで西郡の連歌師孝清がやって来ており、深溝では鶴

殿長持はじめ見翁坊・藤介（鶴殿長忠か）・元心が参加して連歌が行われた。西郡に着くと潮湯の接待があり、その間、千句の打ち合わせが行われた。千句は同月二十五日から始まった。第四の百韻の連衆で、身分などわかる者を挙げると次の通りである。

孝清（西郡の連歌師）・友帆（宗牧弟子）・長帛（鶴殿氏一族か）・無為（宗牧息）・孝順（岡崎の連歌師）・宗牧（連歌師、『東国紀行』作者）・長持（鶴殿氏、上の郡城主）・好景（松平氏、深溝城主）、日超（西郡の日蓮宗僧か）・玄長（鶴殿氏、下の郡城主）・康定（深溝松平好景弟）・清善（松平氏、西郡竹の谷城主）・長忠（鶴殿氏、鶴殿長持息、西郡柏原城主）・元心（松平氏、西郡五井城主）・宗丹（尾張の連歌師か）

ここでは宗牧一行や地元の連歌師以外の連衆は、西郡の鶴殿氏・松平氏、深溝の松平氏の面々である。連衆の顔ぶれを見ると、この千句が鶴殿氏と松平氏の地縁的な連合によって興行されたことがわかる。日超は鶴殿氏が帰依していた西郡の日蓮宗の僧侶であろう。鶴殿氏は日蓮宗を保護し、現在でも蒲郡市には日蓮宗寺院が残っている。

このほか『東国紀行』には、近江国観音寺城下での六角氏被官の連歌会や伊勢国浜田（四日市市）の田原一党の太刀拝見の儀式など国人の連合をうかがわせる記述がある。詳しくは拙著『戦国の権力と寄合の文芸』（和泉書院 昭和六三年）をご覧ください。

員弁川や西郡の国人衆の連合の特徴は、地縁的連合である。北伊勢の員弁川では、鈴鹿山脈と養老山地に挟まれた員弁川流域という地理的環境が一揆の要因となっている。西郡では、鶴殿氏は紀伊国の熊野灘沿岸から移住した家柄であり、松平氏は三河国各地に勢力を占める豪族の一族である。この両氏を連合させる要素もまた、山と海に囲まれた、外部とは独立した地形である。これに較べると浜田の田原一党は俵藤太の子孫という血縁的意識が強く、藤太が龍神より拝領した太刀に対する崇敬が団結心を高めている。これら国人衆の連合が、京都の連歌師の下向を待ちかねるように



して、連歌会を興行するのである。

しかし一揆は時代とともに変容し、崩壊する。後年、各地の国人連合や国一揆は、戦国大名の兵馬に蹂躪され、支配下に組み込まれて行く。北方一揆の国人衆の名は天正十年（一五八二）ごろの『織田信雄分限帳』に記載され、西郡の国人たちは永禄五年（一五六二）上の郡城滅亡の後、徳川氏の麾下に属するようになった。

### 五 三好長慶の『滝山千句』『飯盛千句』

三好長慶は、大永二年（一五二二）三好元長の嫡男に生まれた。成人して管領細川晴元の執事となり、將軍義晴・義輝父子と争って追放し、晴元も退け、細川氏綱を擁立して京都を中心に畿内を支配した。しかし晩年には家臣の松永久秀に実権を奪われ、永禄七年（一五六四）四十三歳で病没した。長慶といい、久秀といい、下剋上の代表的な戦国武将である。長慶はまた、連歌に長じており、長慶が出座した三十以上の連歌作品が残る。

その一つ『滝山千句』は、弘治二年（一五五六）摂津国滝山城で興行した千句連歌で、三つ物の写本が群馬大学図書館新田文庫にある。滝山城跡は、新幹線新神戸駅の北西にあり、布引滝のすぐ西の山上である。弘治二年、長慶は堺の顯本寺で父元長の二十五回忌法要を営み、次いで松永久秀が守備する滝山城で逗留し、千句興行を催した。連衆は、長慶・久秀のほか、連歌師宗養（無為）・元理・等恵、幕府奉行人飯尾氏の一族と思われる為清、堺茶人辻玄哉、さらに傍注のある「池田紀伊」正秀・「芦屋神主」範与・「兵庫久遠寺」快玉である。傍注のように近隣の摂津の地元有力者が連歌に参加していることに注目したい。

『飯盛千句』は、永禄四年（一五六一）河内国飯盛城で興行の千句連歌である。飯盛城跡は、大阪府と奈良県の境の生駒山脈から北西に突き出した孤峯にあり、四条畷市と大東市に位置する。前年、長慶は芥川城より飯盛城に居城を移した。連衆は、長慶のほか、連歌師宗養・元理・紹巴・仍

景(のち昌叱)や、為清 三哉 四 八)ら『滝山千句』の連衆が多い。

『滝山千句』『飯盛千句』、特に『飯盛千句』は、長慶の一族や家臣たち武士の出座が少ない。この点で一揆を表す連歌とは言い難いが、一つ、是非とも指摘しておきたいことがある。それは二つの千句の各発句に詠まれた地名である。『滝山千句』の各発句には、

第一 難波津の言の葉おほふ霞哉	長慶
第二 すみよしといふ名にめてよ帰る雁	宗養
第三 花そちる山には春や水無瀬川	為清
第四 ぬきとめぬ玉江の波か飛ぶ蛭	辻三玄哉
第五 湊川夕塩こえて夏もなし	芦屋神主範与
第六 みしやいつ今朝初島の霧間哉	兵庫久遠寺快玉
第七 氷しや須磨の月こそ夜の海	正秀
第八 鹿の音や生田の沖の山貳	元理
第九 舎りせよ浦は蘆の屋初時雨	等恵
第十 布引のはたはり広し雪の滝	松弾秀代宗養
追加 廿日あまり出るも山や夕月夜(羽東山)	尊世

とあって、傍線で示したように摂津国の歌枕の地名が詠み込まれている。

これに対し『飯盛千句』の各発句には、

第一 汲わすれくみしる月や石清水	長慶 (山城)
第二 木間もる月影幾重氷室山	宗養 (山城)
第三 春日野のとふ火や蛭夕月夜	為清 (大和)
第四 茂る木に月やこもりく初せ風	元理 (大和)
第五 夏の夜の月や水尾行天河	玄哉 (河内)
第六 月残るかた野や行ぬ郭公	直識 (河内)
第七 在明や花も待らん五月山	淳世 (摂津)
第八 影涼し月や堀江の玉柏	紹巴 (摂津)
第九 月出て夏やしの田の森の露	快玉 (和泉)

## 第十 こぬ秋や月にふけ井の興津風 一舟（和泉）

とあって、傍線で示したように五畿内の（ ）内の国の歌枕の地名が詠み込まれている。

『滝山千句』は摂津国の布引の滝の滝山城で詠まれたから摂津の歌枕を詠み込んだといってしまうとそれまでであるが、弘治二年（一五五六）の『滝山千句』が摂津国、五年後の永禄四年（一五六一）の『飯盛千句』が五畿内の歌枕を詠んでいることは、長慶の権力が増強し、支配範囲が伸展するにつれて、詠まれる歌枕の地域が摂津から五畿内へと拡大したことを示していて興味深い。長慶の領国意識がはっきり読み取れるといえよう。本項は一揆精神の変遷に直接関連はないが、武将連歌として参考までに記述した次第である。

## 六 加賀前田藩の『白山万句』

慶長十一年（一六〇六）十月から翌年十一月にかけて加賀国前田藩では『白山万句』が加賀白山社に奉納された。その内、百韻連歌八十四巻が石川県鶴来町の白山比羊神社に現存する。万句連歌といえば、文明十三年（一四八一）偶然にも同じ年に行われた『白川万句』『菊池万句』などがあがるが、『白山万句』のように完全に近い形で保存されているのは珍しい。

この万句には加賀前田藩の家臣二〇〇余名が参加している。主な連衆を見ると、横山長知・前田源夢ら二万石以上の有力家臣をはじめ、波着寺空照・西養寺自笑ら大寺院の住持、中には関ヶ原合戦の後、蟄伏中の宇喜多家の家臣浮田（宇喜多）休閑や後にキリシタンのため追放される内藤徳庵の名が見える。「松」とあるのは、前田利家の正室で人質として江戸に滞在するお松の方（芳春院）であろうか。藩主や藩主一族の名は、奉納者名の中に見当たらない。藩主一族は別に保存されていたのか。そのためかえって現在では存在が不明なのかも知れない。

石高が確認できる連衆中の比率を見ると、一万石未満～五千石以上の者

が約二割、五千石未満～一千石以上の者が約四割である。当時の家臣団の石高について詳しくはわからないが、家中を挙げての奉納連歌であった。各巻に「雲雀」「春雨」といった四季に因む題があり、重出がないので、各座が計画的・組織的に運営されていたことがわかる。

慶長十一年といえば、関ヶ原合戦があった慶長五年（一六〇〇）から六年後、大阪城滅亡の元和元年（一六一五）に先立つこと九年である。近世の幕藩体制の確立しようとする時期、加賀前田藩も混迷の時代を迎えていた。そうした中で、加賀藩の家臣こぞって奉納万句連歌に参加した。『細川千句』や摂津国人衆の連歌同様、主人への忠誠と家臣団の団結が期待されたことであろう。

### 七 江戸幕府の柳営連歌

江戸時代になると三十六句からなる歌仙形式の俳諧連句が隆盛となる。俳諧師と呼ばれる芭蕉や蕪村・一茶は俳諧連句を職業とした者である。一方、百韻を主とした、従来の連歌は衰退し、固定化して行く。江戸時代を通して、連歌は、將軍家の江戸城や伊達藩の仙台城で年中儀式的の連歌として興行された。將軍家の連歌は柳営連歌と呼ばれ、伊達藩の連歌は七草連歌と呼ばれた。一方、神社や寺院では信仰に基づく奉納連歌や祈祷連歌が行われた。福岡県行橋市の須佐神社の夏祭りには、江戸時代を通して、中世以来の奉納連歌が現在も行われている。

柳営とは、匈奴討伐の漢の將軍周亜夫が細柳の地で巧みな陣営を敷いたという故事により、將軍の陣営や幕府のことをいう。室町幕府や江戸幕府の連歌、特に毎年正月十一日の江戸幕府の連歌を柳営連歌と呼んだ。

柳営連歌の写本には、静嘉堂文庫と宮内庁書陵部の『松の春』、都立中央図書館の『御城御連歌』、西尾市岩瀬文庫の『柳の糸』などがある。毎年の百韻は、元和六年（一六二〇）から万延二年（一八六一）までが残る。三つ物では、慶長六年（一六〇一）が最も古く、文久三年（一八六三）

が最も新しい。

発句は、開闢以来、幕府連歌師を勤める南北両里村家、または分家の阪家が詠み、脇は將軍が詠む。ただし將軍の句の大方は連歌師の代作である。以下、連衆は連歌師の瀬川家・浅草の時宗日輪寺住持・亀戸天満宮の大鳥居氏・鎌倉八幡宮の大庭氏・上野の寛永寺の社家渡辺氏・芝神明社の西東氏・烏森稻荷社の山田氏らで、時には京都や太宰府天満宮、または佐渡の連歌師が加わったが、ほとんどは歴代の世襲化した連衆であった。発句も松を詠むことが定まっており、任意に発句を挙げてみても、元和六年の「世にかさす天津みとりや松のはる」、享保五年（一七二〇）の「万代を兼ねても見ゆる松の春」、文政三年（一八二〇）の「玉松に千代そふ春の光哉」、文久三年の「雲井まで薫れ常盤の松の花」というように、類型化した発句の羅列が窺われる。

連衆の世襲といい、発句などの類型といい、形式化し、化石化した柳菴連歌には、中世に見た一揆の面影は微塵にも見いだし得ないのである。

#### 八 国人連歌史料と新歴史主義、付 連歌会の絵図

今回、一九九七年十月二十四日～二十六日に米国ミシガン大学で開催されたMAJLSの「新歴史主義と日本文学研究」というテーマの研究集会に参加して、戦国時代の武士、特に国人衆の連歌作品を史料として国人一揆の変遷を取り上げて研究報告を行ったのが本稿である。

十九世紀においては、世界に繰り広げられた植民地主義・帝国主義を背景として、国家史が隆盛を極めた。その批判として、十九世紀後半から二十世紀にかけて、階級闘争に焦点を合わせたマルクスやエンゲルスの唯物史観や、民族間の文化の発展と融合に視点を置いたトインビーの文明史観などが登場した。二十世紀後半には、経済史・農業史・海運史・科学史などさまざまな分野の歴史研究が発達し、それぞれの分野から歴史を解こうとする勢いが噴出した。

今回の研究集会のテーマとなった新歴史主義は、一九八〇年にアメリカのステューブン・グリーンブラット著『ルネサンスの自己成型』にはじまる文学史観である。時代の中で、歴史の中で文学史をとらえようとし、一方、文学作品を史料として取り上げようとする。近年、日本においても新歴史主義への関心が高まり、多くの論著が刊行されている。私も本研究報告に先立ち、次のような新歴史主義に関する日本語の文献に目を通したが、研究分野の異なる者にとっては非常に難解であった。

高田茂樹「新歴史主義の視点」岡山大学教養部 L I T T E R A 3 一九八八年三月

「特集 ニュー・ヒストリシズム」『現代思想』一九八九年二月

福岡忠雄「理論から歴史へ」彦根論叢264 一九九〇年六月

高田茂樹「塵に遊ぶ—『行人』における時間と人称—」近代68（神戸大学）一九九〇年六月

「特集 文学史の読み直し」『英語青年』一九九一年四月

上野美子「近年におけるシェイクスピア研究」『シェイクスピア 全作品論』研究社 一九九二年

末広幹「クレイオーふたたび—新歴史主義の変貌—」『英語青年』一九九三年四月・五月

S・グリーンブラット（高田茂樹訳）『ルネサンスの自己成型』みすず書房 一九九二年

富山太佳夫ほか「ニューヒストリシズム」研究社 一九九五年—一月

田村章「ジョイス・歴史・新歴史主義—『ユリシーズ』第10挿話を中心に—」主流58（同志社大学英文学会）一九九七年三月

連歌は複数の連衆によって創作され、同時に鑑賞される、世界にも類を見ない文芸の形態である。この作品を史料として扱う時、国人連歌は国一揆・国人一揆の史料としてまことに有意義である。新歴史学を特別に意識するわけではないが、新しい史料として、また新しい史料の解釈に役立つ

ならば幸いである。

なお、ミシガン大学でのMAJLSの研究報告の時、スライドを使って次の一一点の連歌会の絵図を提示したが、本稿では紙幅の都合で絵図の名称だけを掲載する。

#### 1 大和 当麻寺奥院蔵『十界図屏風』

六曲一双 紙本着色 一四二・二×二九五・〇

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道と、声聞・縁覚・菩薩・仏の四聖の十界の内、六道を描き、各扇に和歌（古今集ほか勅撰集）と经文（往生要集ほか）を記す。

#### 2 京都 北野神社蔵『北野曼荼羅』

一幅 絹本着色 一二七・一×七二・六

社寺参詣曼荼羅の一つ、京都北野天満宮の境内、鳥居を入った参道に紅梅白梅と緑の松、奥の社殿に衣冠束帯姿の天神像、鳥居左手に「毎月連歌所」と記された建物の縁に笠を被った人物が腰掛け、参道にも笠を被った人物が二人いるのは笠着連歌の風俗を描いたものか。

#### 3 ロンドン 大英博物館蔵『猿の草子』

一卷 紙本着色 三一・〇×四八・〇

永禄四年頃制作。日吉神社の猿の神主の娘が男子を出産、舅が婿を招いて祝宴を催す草子絵巻。

#### 4 京都 島原角屋蔵『邸内遊楽図』

二曲一隻 紙本着色 一二四・四×三五・三

向かって右側は、吹き抜け屋台の室内の連歌会、奥の床に渡唐天神像を掛ける。左側は、二階家の上では謡の稽古。

#### 5 『竹斎』北野天満宮の連歌会の図

版本挿絵。寛永三年(一六二六)頃刊。富山道治作の仮名草子。古活字本は元和七年(一六二一)頃成立。都の藪医者竹斎が下僕を伴って治療を行いながら東海道を名古屋・江戸へと下る物語。冒頭、見納めに京都市中を

巡り、北野天満宮の連歌会をひやかす。「連歌の座敷と打見えて、唐木の筆台、花梨の文台、下絵の懐紙折重ね、執筆と見えし若男、衣紋気高く引繕ひ、懇懃気にも差し出て、宗匠座敷に直りければ、既に連歌は始まりぬ」とある。

6 金田肇氏蔵『春秋遊楽図屏風(観桜観楓舟遊図屏風)』

六曲一双 紙本着色 一〇四・六×二五九・四

左隻は春、右隻は秋の室の内外の遊楽を描く。左隻第一・二扇に満開の庭の桜を前に室内の連歌会。

7 万野美術館蔵『月次風俗図押絵貼屏風』

六曲一双 紙本着色 一六一×三六一

江戸時代中期の制作 正月の年始回りや五月の流滴馬・七月の盆踊りなど一二月の風俗を、正月から六月までは左隻に、七月から一二月までは右隻に描く。連歌の図は、右隻第二扇、山の端に出た満月の下、開け放された座敷では連歌会が行われている。

8 大和 長谷寺蔵『天神祭礼絵』

一幅 紙本着色 一五四・七×九九・〇

毎年旧暦九月（現在は十月十九日・二十日）の奈良県櫻井市初瀬の与喜天満宮例祭図。与喜天神を出発し、初瀬の町中を練り歩く御輿。左上の寺内では連歌会。連歌会場の畳が所々白くなったのは破損箇所、奥の床には衣冠束帯の天神像が掛かる。箱蓋の裏には「与喜山九月祭礼絵 信怨令図絵之」とある。信怨（一六八五～一七六三）は、延享三年から宝暦一〇年（一七四六～一七六〇）の二十四世長谷寺能化（管長）であった。

長谷寺には原本とほぼ同じ大きさの『天神祭礼絵』の模写本一幅があって「九月天神祭礼図」とある。

9 『三芳野名勝図会』河越連歌千句之図

版本挿絵。享保元年（一七一六）刊。中島孝昌編、春曙堂松月画。川越城中鎮座の「三芳野天神社」の項で、文明二年（一四七〇）太田道心・



心敬・宗祇らの川越千句の挿絵。吹き抜け屋台の殿中に烏帽子姿は道心、二人の僧侶は心敬・宗祇か。

10『巖島図会』巖島神社 天満宮毎月連歌会の図

版本挿絵、天保一三年（一八四二）刊。岡田清編、山野峻峯齊ほか画。巖島神社の海に浮かぶ社殿で狩衣や袴姿の神官たちが連歌を行っている。ほかに巻之一中、境内の建物を描く「本社客人社」には「天神」と記された社殿がある。

11三河大浜(碧南市)称名寺蔵『御連歌式之図』

一幅 絹本着色 一〇一・五×三七・〇

落款に「癸卯冬日文翠筆」とあって、制作は明治三六年冬かと推定される。大浜の称名寺は、天文十三年（一五四四）『東国紀行』で連歌師宗牧が訪問。また家康の幼名竹千代が称名寺の連歌の脇句「園の千代竹」に由来するといっているので、江戸時代、幕府より厚い庇護を受け、柳営連歌や浅草日輪寺と交渉が見られる。

Excerpt

**Historical Change in the Spirit of Solidarity in Renga Meetings**

Tsurusaki Hiroo

Tezukayama Gakuin University

In medieval Japan, there existed a number of warrior solidarities ("ikki"), united through blood relations and/or shared communities. Sharing the spirit of the ikki (lit., to share a moment together), renga meetings became popular among warriors. The meetings consisted of a group of participants (from 4 or 5 through a dozen or so), who created, by turn, a hundred verses; such group performances helped warriors further strengthen their spiritual unity.

Detailed records of several renga meetings are available. In fifteenth and sixteenth centuries, the Hosokawa family annually offered, as hereditary head of the Muromachi government, a set of one thousand verses to Kitano Tenman Shrine in Kyoto. Their meetings consisted of five groups ("za"), each of which produced two sets of one hundred verses a day. A za assisted by a shogun started with the shogun's verse, followed by a Hosokawa who chaired the gathering. Sometimes, a shogun did not actually attend the meeting; and fairly often, his verse was prewritten for by a professional. Shogun's authority was thus ritualistically respected and more obviously, the power of the Hosokawa was celebrated (Titles of other za contained names of the lands the family governed). By inviting a number of the family members and retainers, the Hosokawa used this opportunity to solidify its unity.

One of Hosokawa's land holdings, Settsu, held its own renga meetings. According to records, local leaders organized gatherings in order to solidify their unity under the Hosokawa. The records also show that important renga professionals such as Sōgi, Sōchō, and Shōhaku participated in some of these meetings in Osaka. The records also show that the political power shift sharply reflected on the shaping of participants of different renga performances.

Sōboku wrote a travel diary that recorded his journey to the East which went as far up as the Barrier at Shirakawa. According to his book, his group frequently stopped at different lands and were invited to renga meetings which local poets eagerly organized with them. Lists of renga participants in different areas allow us to see details of local power constituents at the time of Sōboku's journey, which took place in the mid-sixteenth century.

Miyoshi Nagayoshi was one of the powerful military leaders of that politically unstable period. The records of renga meetings he chaired indicate his ambition for territory expansion. Renga poems consistently include place names he governed -- first in

Settsu and later a more expansive areas including Yamashiro, Yamato, Kawachi, etc.

In the early seventeenth century, Lord Maeda in Kaga organized a large renga gathering of a ten thousand verse collection, involving the participation over two hundred retainers. This is one of the last well-organized renga meetings of the medieval period.

In the Edo period, haikai renga became the main stream poetry performance genre, with creative professional poets such as Bashō and Buson. Traditional renga was still performed by Tokugawa shogun, Lord Date in Sendai as well as at different Shintō shrines and Buddhist temples. Their performances were, however, ritualistic and no longer vividly creative.

[E.S.]